

「学ぶということ」

1 コロナ対応において、教育委員会としてどのようなことに意を用いたか。

- 年度末、年度初めの大切な時期に休校が続きました。感染拡大を防ぎ、生徒の安全確保に努める中で、いつ学校を再開するのか、またどのように通常の学校生活に戻していくのか、このような状況は前例のないことで、非常に難しい問題でした。
- 休校による長い休みが明けましたが、学校生活にまだ十分慣れないうちに、これからは暑い中での学校生活が続きます。夏休みも例年より短くせざるを得ません。生徒の皆さんが心身の健康をどう維持していけるか。教育委員会としては今最も心配していることです。
- 何もかもすぐに取り戻そうとせず、焦らずに勉強や部活動に取り組んでください。少々時間がかかっても大丈夫です。自分の力、学校の力、社会の力を信じてほしいと思います。
- 特に、就職や進学の時期を迎える高3生、そして中3生は不安の中で本当にたいへんな時期を過ごしていると思います。教育委員会として何ができるかを考えているところです。

2 大学進学後の理系から文系への進路変更は、どういう心境からなのか。また、そのことを現在どのように受け止めているか。

- まず高校時代。歴史や文学に興味がありましたが、数学の問題を解くのが楽しかった、というだけで、高2では何となく理系クラスに入りました。大学は文系志望でしたが、理系クラスの居心地がよかったので、高3でもそのまま理系クラスに残りました。そのため数Ⅲや理科の授業は聞き流していましたが、その姿勢が他の科目にも影響し、成績が怪しくなってきたので、高3夏休みに急遽、理系大学受験に切り替えました。数Ⅲや理科を本気で勉強し始めましたが、もちろん間に合わず、予備校で勉強し直しました。
- 大学1、2年次の教養課程では、数学の抽象的な理論や、物理・化学・生物の実験に全く興味が持てず、一方で江戸期思想家の原典講読や第三外国語のイタリア語がおもしろく、そこで高校時代の初心に戻って歴史を学ぼうと思ひ立ち、文学部に進学しました。
- 高校・世界史の教員として仕事をしてきたこの人生しか私にはありません。人生で選択する場面はたくさんあって直面するたび迷います。右に行ったり左に行ったり、その時は紆余曲折している感じがします。しかし後から振り返ると、今の自分に至る一本のまっすぐな道があるだけです。「振り返ればそこに一本の道が」。後悔はあり得ません。

3 「学ぶということ」について、中学生・高校生にメッセージを。

- 私たちは学校で、たくさんの知識を身につけ、様々な経験をします。これは私という存在が確固としてあって、その私が知識を身につけ、経験をするものではありません。知識や経験が、私という存在、人格を形作るのだと思います。
- 知識や経験によって世界が広がり、心は広やかになります。その心は知識や経験を深めていくと、いつかきっと普遍的なものに触れます。その心が、人生の重大な選択の場面で決断に迫られる時の、落ち着き、覚悟、潔さにつながるのだと思います。
- 学校生活には、教科科目の授業はもちろん、授業以外でも可能な限り幅広く知識や経験を積み重ね、自分の世界を広げておくといいと思います。それがこれからの長い自分自身の人生を支える大事な基盤になるはずで、学校とはそういうところだと思います。